

2013 年(平成 25 年) 3 月 21 日

第 5 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

受賞者の決定および表彰式開催のお知らせ

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)では、「第 5 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」の選考を行ない、平成 24 年度の受賞者について下記のとおり決定しました。

同賞は、スポーツ振興において多大な実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物を表彰する制度です。平成 20 年度に表彰制度を創設し、今回で 5 回目の実施となります。

なお、「第 5 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 表彰式」を、2013 年 4 月 9 日(火)に東京會館(東京都千代田区)にて開催します。

記

第 5 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 受賞者 (敬称略)



[功労賞]

樋口 豊 (フィギュアスケートコーチ、振付師、解説者)

国際的な信頼と幅広いネットワークを活かし、日本フィギュアスケートの「開国」に貢献



[奨励賞]

江黒 直樹 (ゴールボール女子日本代表チーム ヘッドコーチ)

「楽しいリハビリスポーツ」の普及をめざした 日本女子ゴールボールチーム 金メダルへの挑戦

第 5 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 表彰式

◆日時 : 2013 年 4 月 9 日(火)

表彰式/15 時 00 分～、交流会/16 時 00 分～ (受付/14 時 30 分～)

◆会場 : 東京會館(東京都千代田区丸の内 3-2-1) 11F ゴールドルーム

■ この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団 (YMFS)

担当・望月 〒438-8501 静岡県磐田市新貝 2500 番地

Tel. 0538-32-9827 Fax. 0538-32-1112 <http://www.ymfs.jp>

■ ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞の概要

「ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」は、スポーツ界において多大な実績を残すとともに、その功績によって社会の活性化に貢献した人物を表彰するものです。スポーツ振興において「縁の下の力持ち」として活躍する(した)チャレンジスピリットあふれる受賞者の実像を通じ、挑戦することの尊さを広く社会に伝播することを主な目的としています。競技者をはじめ、指導者や研究者、また普及・支援に携わる人々やジャーナリストなど、さまざまな分野において成果を上げた人物を対象とし、合わせて目標に向かって自分自身を磨き上げるそのプロセスを重視して、その努力と成果に敬意を表して表彰を行います。

	功労賞	奨励賞
対象となる チャレンジ	長年にわたるスポーツ振興への貢献や過去の先駆的実績を誇るチャレンジ	今後のスポーツ振興に大きな影響力が期待される、その年、極めて高い成果を上げたチャレンジ
表彰対象者	すでに優れた成果を上げ、功を成した人物	その年、高い成果を上げ、今後さらなる成長が期待される人物
評価の ポイント	長年もしくは過去に行われ、年数を経てから高い成果と認められた尊敬に値する礎的、先駆的なチャレンジであること。たとえば指導者、研究者、審判、ジャーナリストなどによる、その競技やスポーツ全体の底上げに貢献、もしくは海外などで裾野拡大に尽力したチャレンジなど。	短期的、もしくは中期的に行われ、その年に高い評価を受けた賞賛に値するチャレンジであること。たとえば指導者、研究者、トレーナー、サポートメンバー、審判、ジャーナリストなどによる世界レベルの成果を発揮するにあたり、重要な役割を果たしたチャレンジなど。
賞金／副賞	賞金 100 万円(チームの場合は 200 万円) 賞状・メダル / 副賞	

■ 歴代受賞者の紹介 (敬称略)

	受賞者		分 野	選考の理由となったチャレンジテーマ
第 1 回 平成 20 年度	功労賞	中野 政美	柔道指導者	女子柔道の世界レベル選手の育成と女子柔道の発展
	奨励賞	丸山 弘道	車いすテニス指導者	北京パラリンピック金メダルへのチャレンジ
第 2 回 平成 21 年度	功労賞	塚越 克己	スポーツ医・科学研究者	日本のスポーツ医・科学の発展を牽引した「縁の下の力持ち」
	奨励賞	増田 雄一	アスレティック・トレーナー	トップレベルのサポート技術を一般レベルに拡大する取り組み
第 3 回 平成 22 年度	功労賞	高田 静夫	サッカー審判員	日本人審判員の育成をめざした各種制度の確立と運用
	奨励賞	中村 宏之	陸上指導者	雪国から世界をめざすトレーニングの独自開発と実践
		中北 浩仁	アイススレッジホッケー指導者	強化システムの大改革で日本初のメダル獲得にチャレンジ
第 4 回 平成 23 年度	功労賞	岸本 健	スポーツ写真家	スポーツ写真家の草分けとして、スポーツ報道の機会拡大に貢献
		水谷 章人	スポーツ写真家	独創的な表現でスポーツの魅力を伝え、スポーツ写真家の育成・環境整備にも尽力
	奨励賞	(該当なし)	—	—

■ 選考委員会 (敬称略)

選考 委員長	浅見俊雄	東京大学名誉教授 日本体育大学名誉教授
	西田善夫	スポーツアナリスト (元 NHK 解説委員)
	福永哲夫	鹿屋体育大学学長 / 東京大学名誉教授
	伊坂忠夫	立命館大学スポーツ健康科学部教授・副学部長
	景山一郎	日本大学生産工学部教授
	草加浩平	東京大学大学院工学系研究科特任教授
	篠原菊紀	諏訪東京理科大学共通教育センター教授
	綿貫茂喜	九州大学大学院芸術工学研究院教授
	衛藤隆	社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 日本子ども家庭総合研究所所長 / 東京大学名誉教授
選考 委員	遠藤保子	立命館大学産業社会学部教授
	川上泰雄	早稲田大学スポーツ科学学術院教授
	小西由里子	国際武道大学体育学部教授
	定本朋子	日本女子体育大学大学院研究科長 基礎体力研究所所長・教授
	田原淳子	国士舘大学体育学部教授
	山本裕二	名古屋大学総合保健体育科学センター教授
	ヨーコセ・ッターラント*	スポーツキャスター (元バレーボール選手)
	今給黎教子	海洋スポーツインストラクター / 冒険家
	村田 互	専修大学ラグビー部監督 (元ラグビー選手)

※競技団体、大学、報道機関、ジャーナリスト等から候補者の推薦を募り(募集期間 2012 年 9 月 22 日～11 月 15 日)、2 回の選考委員会を経て決定

第 5 回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 功労賞

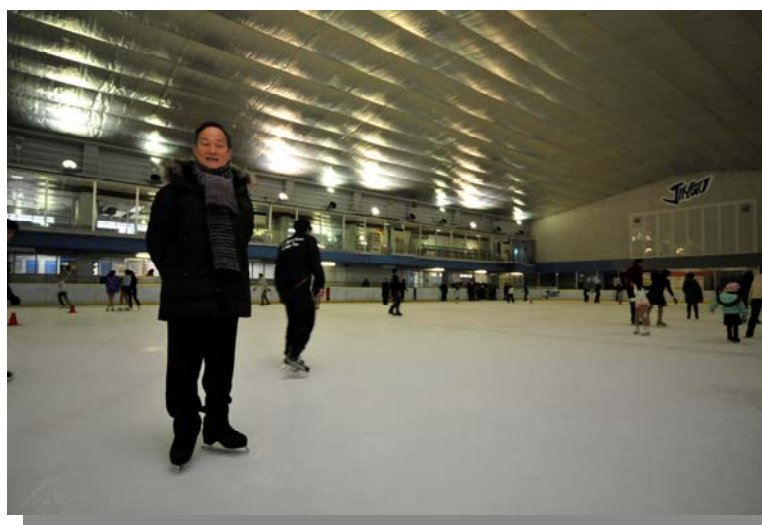
国際的な信頼と幅広いネットワークを活かし、 日本フィギュアスケートの「開国」に貢献

ひぐち ゆたか
樋口 豊 フィギュアスケートコーチ、振付師、解説者（1949 年生・東京都出身）

明星学園高校在学中、グルノーブルオリンピックに出場。高校卒業と同時に冬季スポーツの本場であるカナダに留学し、有色人種としては初めてトロント・クリケット・スケーティング・アンド・カーリングクラブのメンバーとなった。同クラブには、北米はもとより各国から世界的なスケーターや指導者、振付師らが集まり、樋口氏はそうした環境の中で技術や表現力を磨き、全日本選手権での 3 連覇を達成するとともに札幌オリンピックにも出場した。

この当時の交流により築かれた国際的な信頼と幅広いネットワークは、引退後、指導者の道を歩み始めてから日本フィギュアスケート界の発展に大きな影響をもたらすことになった。1990 年代半ばに JOC 専任コーチに就任すると、長野オリンピックに向けて「海外のコーチや振付師から指導を受けるべき」という強化方針のもとで、日本人強化指定選手と外国人指導者をつなぐパイプ役として活躍した。荒川静香選手とトラン・クランストン氏（振付師）やリチャード・キャラハン氏（コーチ）、本田武史選手とズミル・スカヤ氏（コーチ）やダグ・リー氏（コーチ）らの長野世代を中心に、その前後の伊藤みどり選手とデビッド・ウィルソン氏（振付師）、村主章枝選手とローリー・ニコル氏（振付師）、安藤美姫選手とキャロル・ハイツ・ジェンキンス氏（コーチ）らの師弟関係も樋口氏のコーディネートによって実現した。

海外の指導者から薫陶を受けた長野以降の日本人選手の表現力は格段に向上したと言われ、この世代からは宮本賢二氏（振付師）をはじめとする世界的な指導者が育つなど、日本人指導者の育成にも大きな影響を与えることになった。



明星学園高校、法政大学卒業。選手としてグルノーブルオリンピック（1968 年）および札幌オリンピック（1972 年）に出場。全日本フィギュアスケート選手権では 3 連覇（1969～71 年）を達成した。引退後は指導者となり、後楽園アイスパレス、品川プリンスホテルアイスアリーナ、高野アイスアリーナ等で指導を行い、1990 年代半ばに JOC 専任コーチに就任。長野オリンピック代表選手と世界的な指導者のパイプ役を担った。現在は明治神宮アイススケート場のヘッドコーチ、シンクロナイズドスケーティングチーム「神宮 ICE Messengers Grace」のコーチを務めるとともに、NHK や J SPORTS でフィギュアスケート中継の解説者としても活躍する。

第5回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 奨励賞

「楽しいリハビリスポーツ」の普及をめざした 日本女子ゴールボールチーム 金メダルへの挑戦

えぐろ なおき
江黒 直樹 ゴールボール女子日本代表チーム ヘッドコーチ（1965年生・埼玉県出身）

ゴールボールの本質は、視覚障害者が楽しみながら「音をとる能力」や「方向や位置を確認する能力」を養うリハビリスポーツ。その効能は日常生活にも役立つものでありながら、これまで競技の存在自体が広く知られてはおらず、また視覚障害者の間でも「痛い」「怖い」というイメージが先行して普及には至らなかった。日本ゴールボール協会の理事でもある江黒氏は、代表チームの活躍や各種普及活動を通じてリハビリスポーツとしてのゴールボールを広めるため、人々の注目が集まるパラリンピックでの金メダル獲得をめざした。

ヘッドコーチとして日本女子チームを率いたアテネパラリンピックでは、初出場ながら銅メダルを獲得。アシスタントコーチとしてチームを支えた北京パラリンピックは7位に終わったが、北京大会後、再びヘッドコーチに就任するとロンドンパラリンピックまでの4年間にわたる長期強化計画を組み、栄養、心理、体力測定・強化、映像サポートなど、各分野の専門家に協力を仰ぎながら積極的に科学的トレーニングを導入・実践した。選手の多くはスポーツ未経験者であったことから、その指導は生活習慣の改善にまで及んだ。

また、ゴールボールの競技特性をあらためて研究・分析するとともに、日本人の俊敏性を活かして攻守の切り替えスピードとカバーリング技術を徹底して磨き、日本チームのストロングポイントである鉄壁の守備を築き上げた。同時に国際大会への出場頻度を倍加させ、選手の経験値を高めるとともに、日本独自の技術や作戦の精度・熟度を高めていった。こうして挑んだロンドンパラリンピックでは、それまで重点的に取り組んできた守備力で強豪国を上回り、夏季・冬季合わせて日本初となるパラリンピック団体競技での金メダル獲得を実現した。



帝京高校、日本体育大学卒業。大学時代から障害者教育の現場に携わり、卒業後は全国障害者総合福祉センターや国立福岡視力障害者センターに勤務。2001年からは日本ゴールボール協会の運営委員（2003年から理事）としてゴールボールの普及・強化に取り組み、アテネパラリンピック（2004年）では女子日本代表チームのヘッドコーチ、北京パラリンピック（2008年）ではアシスタントコーチとしてチームを支え、ヘッドコーチに再任したロンドンパラリンピック（2012年）ではチームを悲願の金メダルに導いた。現在は国立障害者リハビリテーションセンターで医療教育・就労支援部の教官を務める。